

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720049

研究課題名(和文) 後期ビザンティン聖堂(13～15世紀)における「儀礼化」の進展

研究課題名(英文) Development of the Ritualization of Iconographic Program of Late Byzantine Churches (13th -15th Century)

研究代表者

菅原 裕文 (Sugawara, Hirofumi)

早稲田大学・付置研究所・その他

研究者番号：40537875

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は後期ビザンティン聖堂(13～15世紀)における図像プログラムの儀礼化の一端を明らかにするものである。儀礼化とは典礼の変化に伴う、建築形態の変化・新図像の創出・図像プログラムの変化といった諸現象を指す。

後期ビザンティンでは、図像プログラムが以前の時代と比して複雑化・多層化する。本研究を通じて、アプシスには複数の教義を含意する多義的な図像を好むようになったこと、受難伝図像が大幅に増補された背景には文学の分野における受難伝の大衆化があったことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： The aim of this study is to figure out development of the ritualization of iconographic program of late Byzantine churches (13th -15th Century). Ritualization is changing in architectural style and iconographic program, and creation of new iconography according with liturgical changes.

In late Byzantine churches, it has been well known that iconographic programs had become complicated and multi-stratified compare with the ones in middle Byzantine period. Through this study, it could be said that there was a trend toward polysemic iconography with plural dogmatic connotation like the Virgin Platytera as decoration of apse and that the enlargement of the Passion Cycle in 13th-century churches was brought about popularization of the Passion in middle Byzantine era.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：ビザンティン聖堂 後期ビザンティン 図像プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

中期ビザンティン(9~12C)はビザンティン聖堂の変革期にあたる。聖堂建築はバシリカ式からギリシア十字式に移行し、聖所前面にイコノスタシスが設けられた。これは聖所内の聖体準備室で準備されたパンとワインを主祭壇に搬入する行進儀礼の一般化や、主祭壇で行われる聖変化や聖体奉獻を会衆の視線から隠す方針の採択等、典礼の執行方式の変化と密接に関わっている。その結果、聖所内での儀式の意義を図解する「使徒の聖体拝領」やエレウサ型聖母子像等、新たに創出された図像がそれぞれ聖所に固有の場を占め、装飾プログラムは高度に規格化された。

C・ウォルターが「儀礼化 Ritualization」と呼ぶ「典礼の変化に伴う建築形態の変化・新図像の創出・装飾プログラムの規格化」に関する研究は、中期のカップパドキアにおいて最も進展している。C・ジョリヴェ＝レヴィは250に及ぶ岩窟聖堂の聖所に配された図像をカタログ化し、辻佐保子氏は彼女の研究に基づいて同地への「使徒の聖体拝領」の導入を論じた。筆者も貴会特別研究員としてエレウサ型が聖体準備室に配されることを発見し、鹿島美術財団の助成によりこのプログラムの成立に先の行進儀礼が深く関与していることを明らかにした。

しかし、ウォルターは中期の動向に専念し、かつ12Cにはカップパドキアの修道文化が途絶するため、後期ビザンティン(13~15C)に至る儀礼化の連続性はこれまで語られてこなかった。

## 2. 研究の目的

本研究では文献史料と装飾プログラムの分析を通じて、中期から後期に至る儀礼化の歴史的展開を辿り、新たに聖体準備室とアプシスに配されるようになった図像の機能分析により、中期と後期の儀礼化にいかなる性格の相違が見受けられるのかという二つの問題を解明する。

本研究では調査対象を聖所に限定するが、それは聖所が典礼の核となる様々な儀式を行う多機能な場であり、儀礼化が著しく進展したと目されたためである。調査領域は旧ビザンティン属州のマケドニア地方(旧ユーゴ・マケドニア共和国、ギリシア北部、ブルガリア西部、セルビア南部、コソボ)とする。帝国第一の属州だったマケドニア地方には後期だけでなく中期の聖堂も多数残存するため、中期の遺構しかないカップパドキアとは異なり、中期から後期に至る儀礼化の連続性をつぶさに観察できた。

## 3. 研究の方法

文献史料と図像プログラムの分析を通じて、中期から後期に至る儀礼化の歴史的展開を辿り、アプシスと聖体準備室に配されるようになった図像の機能分析により、中期と後期の儀礼化にいかなる性格の相違が見受けられるのかという問題を解明する

## 4. 研究成果

儀礼化とは、「典礼の変化に伴う建築形態の変化・新図像の創出・図像プログラムの変化」の諸現象を指す。「ビザンティン聖堂儀礼化研究序説」では、ビザンティン聖堂362例について聖所のプログラムを分析し、初期から後期にかけて、聖所のプログラムにどのような変化が見られるかを辿った。その結果、アプシスと聖体準備室に置かれる図像に大きな変化が見られたのに加え、後期になると典礼儀式の意義を図解しようとする図像が挿入される等、後期ビザンティン聖堂のプログラムの特色が明らかになった。

前項の研究を承け、後期の作例との比較するために中期の作例に立ち返って、図像プログラムと典礼の関係論じた。カップパドキア、ギョレメ地区に残るいわゆる「円柱式聖堂」3例は11世紀中葉に同一の画家、あるいは同一の工房による作品と考えられている。その制作順は研究者の間でも長らく議論され、これまで「カランルク エルマル チャルクル」の制作順と考えられてきた。本稿で、本論では、円柱式聖堂の聖所に採用された幾つかの図像とそのプログラムから、ギョレメ地区の先行作例との類似点を見だし、典礼儀式との関連から、円柱式聖堂の制作順が定説とは反対の順にあると結論した。

後期ビザンティン聖堂において、プラティテラ型聖母子像(胸にインマヌエルのメダイオンを伴うオランスの聖母子像)がアプシス装飾の主流となった要因を考察した。後期になると図像プログラムは多層化・複雑化する一方で、聖堂建築そのものは小規模な単廊式バシリカが主流となる。画家たちが直面したのは、どのようにして狭い壁面で様々な教義を効果的に伝えるかという問題であった。

プラティテラ型聖母子像は、オランスの姿勢が寄進者に対する加護を、インマヌエルのメダイオンが神の受肉を表す。さらに、様々なアトリビュート・姿勢の天使を伴うことで、キリストの受難や聖母の眠りといった様々な教義を表しうる図像である。それゆえに、画家はプラティテラ型聖母子像を、小聖堂の狭い壁面でも複数の教義を表現しうるオール・イン・ワンの図像として採用したものと推測される。

後期ビザンティンになると、装飾プログラムは多層化・複雑化し、とりわけキリスト伝サイクルは受難伝図像が大幅に増補され

ることは早くから指摘されてきたが、これまでその要因を解明した研究はなかった。本論では、後期ビザンティン聖堂の嚆矢と目されるマケドニア、ヴァロシュのスヴェティ・ニコラ聖堂のプログラムを中心に、その変化の要因を探った。後期ビザンティンの装飾プログラムでは、中期ビザンティン(9~12世紀)で主流となった十二大祭サイクルに加えて受難伝図像が大幅に増補され、中期では描かれることが少なかった図像や後期になって新たに創出された図像が挿入される。

この受難伝図像の大幅な増補は文学史的な発展と並行する現象であると考えられる。イコノクラスムにおいてキリストの人生を擁護するためマリアを主人公とする受難伝講話が創出された。受難伝講話は典礼に取り込まれ、人々は典礼の実践を通じて、受難伝のイメージを豊かに膨らませていった。13世紀までに受難伝は大衆化し、受難を主題とする演劇のシナリオも制作されている。これらのことから、後期における受難伝の増補には、中期の典礼および文学における受難伝の拡大と大衆化が関係していることが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

菅原裕文「優しさの形 — エレウサ型アンナ像の出現とその意義」『地中海学研究』第35号(2012年5月)55-74頁(査読有)

Hirofumi Sugawara, "Anna as Eleousa: Representation of Tenderness," *Patrimonium. MK V* 10, (2012.9), pp. 139-152. (査読有)

Хирофуми Сугавара, "Упогата на Ангелите кои ги опкружуваат Бодородица и Христос," *Премини*, 83/84 (2012.11), pp. 72-28. (査読無)

菅原裕文、益田朋幸「カッパドキア円柱式聖堂群の装飾プログラムと制作順」『美術史研究』第50冊(2012年12月)45-79頁(査読有)

菅原裕文「ビザンティン聖堂儀礼化研究序説 — 後期ビザンティン聖堂(13~15世紀)における儀礼化の進展」『エクフラシス』第3号(2013年3月)123-144頁(査読有)

菅原裕文「キリスト伝サイクルの変容とスヴェティ・ニコラ聖堂の装飾プログラム — 後期ビザンティン聖堂(13~15世紀)における儀礼化の進展」『Waseda RILAS

Journal』第1号(2013年10月)43-53頁(査読有)

〔学会発表〕(計4件)

国内学会、講演：菅原裕文「ビザンティン聖堂における装飾プログラムと象徴性」早稲田高等研究所高等研究所セミナーシリーズ【比較文明史】第4回シンポジウム「建築から見るイスラーム教とキリスト教」早稲田大学、2013年1月

国内学会、査読無：菅原裕文「後期ビザンティン聖堂(13~15C)におけるプラティテラ型聖母子像」早稲田ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所第12回研究会、早稲田大学、2013年4月

国内学会、査読有：菅原裕文「12~14世紀のビザンティン聖堂におけるキリスト伝サイクルの変容 — マケドニア、ヴァロシュとマナスティルのスヴェティ・ニコラ聖堂を中心に」美術史学会東支部例会、2013年7月

国内学会、講演：菅原裕文「学び合う画家たち — マケドニア南西部のビザンティン聖堂群におけるイメージの借用」WIASセミナーシリーズ【比較文明史】第11回シンポジウム「コミュニティと相互交流 — 中世地中海世界の東西の事例から」2013年10月

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

( )

研究者番号：

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：